

## I 研究主題と副題

『子どもも教師もワクワクする道徳科の授業づくり』  
～ 指導と評価の一体化を図った授業づくり ～

## II 主題設定の理由

本年度より道徳の教科化がスタートした。今回の道徳教育の改善に関する議論の発端となったのは、いじめの問題への対応であり、子どもがこうした困難な問題に主体的に対処することができる実効性のある力を育成していく上で、道徳教育が大きな役割を果たすことが強く求められている。

特に、道徳科においては、教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくことが大切であり、授業の評価を改善につなげる過程を一層重視する必要がある。

このような状況の中、本市においては、「道徳教育及び道徳科の授業に、質・量的な差がみられること」、「道徳の教科化がスタートし、学習指導や評価について不安を抱える教師が多いこと」などが、各学校の教師の実態として挙げられる。また、昨年度の本研究の課題として、「葛藤教材以外の教材での授業づくりと授業実践」、「評価の在り方」、「研究内容の発信と共有化」などが挙げられる。

そこで本研究では、昨年度に引き続き、「教師がおもしろいと感じる授業は、子どももきつとおもしろいと感じる」という信念の下、教師が楽しんで授業づくりを行うことが重要であると考えます。

本年度は、昨年度の課題として挙げられていた「評価の在り方」を研究内容に新たに盛り込み、「指導と評価の一体化を図った授業づくり」の研究に取り組んでいく。具体的には、評価の観点を基に、指導と評価の一体化を図りながら本研究を進めていくことで、本市の「わかあゆ教育プラン」の実現が図られるとともに、本市の教職員の道徳科を中心とした授業改善や授業力向上につながると考え、本主題を設定した。

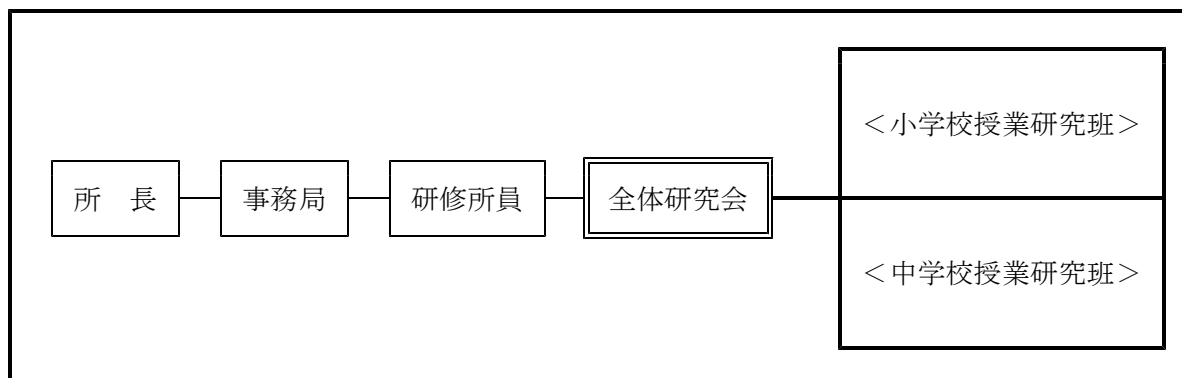
## III 研究目標

道徳科における指導と評価の一体化を図った授業づくりや授業改善を行うことで、子どもも教師もワクワクする道徳科の授業の在り方を提案する。

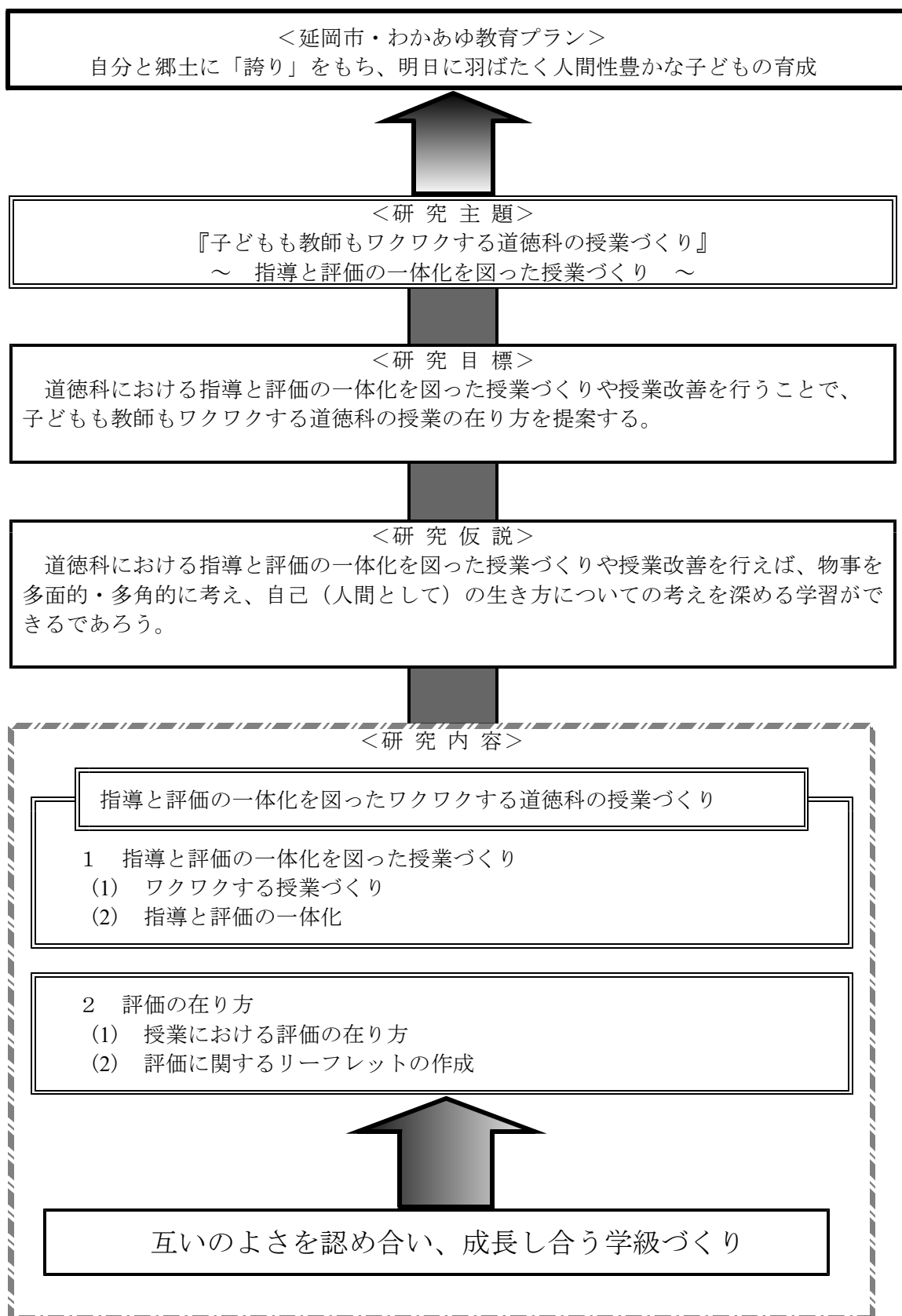
## IV 研究仮説

道徳科における指導と評価の一体化を図った授業づくりや授業改善を行えば、物事を多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深める学習ができるであろう。

## V 研究組織



## VI 研究構想



## VII 研究内容

本研修所では、これまでの「道徳の時間」における課題や子どもの実態から、道徳科の目標達成のためには、子どもはもちろん、指導者である教師もワクワクするような授業実践を行うことが必要であると考え、昨年度から2ヶ年の計画で研究に取り組んできた。

本研究では、延岡市内の抽出児童生徒796人、教師173人へのアンケート結果（H29年度実施）から目指す道徳科の授業を以下のように設定した。

### 子どもにとってワクワクする道徳科の授業

- ・ 友だちの意見によって、自分の考えが変わったり、広がったりする。
- ・ 自分の意見をみんな（友だち、先生）に認めてもらえる。

### 教師にとってワクワクする道徳科の授業

- ・ 子どもたちが互いの考えを認め合ったり、磨き合ったりする。
- ・ 子どもたちが自分の思いや考えを本音で語り合っている。

本研究で目指す道徳科の授業を達成するために、昨年度は、ワクワクする授業づくり、ふるさとを題材にした教材づくりの2つの柱で研究を進めてきた。概要は以下である。

#### ① ワクワクする授業づくり

- ・ 教材の特徴や子どもの実態を考慮して、ねらいを教材レベルで具体化することで、本時に気付かせたい価値や認め合い、磨き合わせたい価値観を明確にする。
- ・ 多面的・多角的な思考を促す発問やネームカード、役割演技等の学習用具、学習方法の工夫を通して、子どもの思いや考えを引き出す。

#### ② ふるさとを題材にした教材づくり

- ・ 郷土延岡や先人の営みを教材化し、子どもの心に響く地域教材を開発する。

上記を3回の授業で検証し、多くの成果を得ることができた。しかし、本年度から本格実施された（中学校では来年度から）道徳科を行うに当たって、まだまだ課題は山積みである。その課題の中でも特に解決が必要なものを以下の様に今年度の柱に設定し、研究を進めてきた。

#### ① 葛藤教材以外でワクワクしたい

- ・ 昨年度は、葛藤教材を中心にワクワクする授業づくりを行ってきたが、道徳科で扱う教材は実話に基づいた感動教材や身近な出来事を取り上げた教材など多様にあるため、様々な教材を使用して、ワクワクする授業づくりを行っていく。

#### ② 評価の在り方を深めたい

- ・ 「道徳の時間」が「道徳科」となり評価が位置付けられたことにより、子どものよりよい変容を見取ることのできる評価方法を確立し、指導と評価の一体化を図っていく。

### 1 指導と評価の一体化を図った授業づくり

本年度は、小学校2回、中学校2回の計4回の授業を通して、上記の柱の検証を行った。検証授業の際には、小学校と中学校において子どもの実態に大きな違いはあるが、小中9か年間のどの段階でも対応できる視点を大切に成果と課題を挙げ、それらを次の検証授業へと繋いでいった。ここからは、以下の計画で実際に行った検証授業に沿って研究を紹介していく。

期日	学年	内容項目	教材名
9月11日	小学校6年	A-5 希望と勇気、努力と強い意志	小川笙船
9月20日	中学校3年	B-6 思いやり、感謝	夢は大空に（地域教材）
10月22日	小学校3年	B-10 友情、信頼	目の前は青空
11月22日	中学校2年	D-22 よりよく生きる喜び	足袋の季節

## 検証授業 I

恒富小学校 第6学年1組 内容項目A-5 希望と勇気、努力と強い意志

主題名 志をもって (教材名「小川笙船」 出典：光村図書)

<教材レベルで具体化したねらい>

4月に実施した同一の内容項目「あきらめないで」の学習を生かして、「何かをやりとげるのに、一番大切なのはどんな心？」をテーマとした問題解決的な学習と笙船への自我関与が中心の学習を織り交ぜ授業を展開することで、「希望をもつこと」や「希望をもつが故に直面する困難を乗り越える人間の強さ」の大切さに気付かせ、目標の達成に向けて努力しようとする道徳的実践意欲と態度を養う。

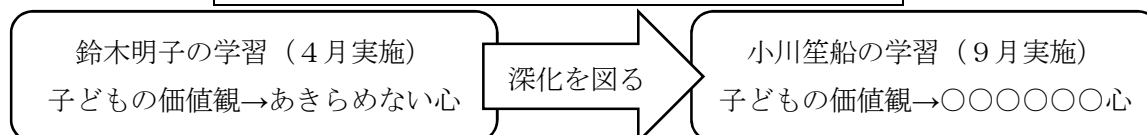
### (1) ワクワクする授業づくり

本教材は、小川笙船の功績を扱った実話教材である。実話教材は、道徳科の教材として数多く登場する。しかし、授業においてこのような実話教材を扱う時、子どもたちは「すごいなあ。」や「立派だなあ。」と感動や尊敬の念は抱くものの、ワクワクしたり、自己の生き方に生かしていこうとしたりすることが難しいと感じていた。そこで以下の2つの手立てを設けることで、ワクワクする授業づくりに取り組んだ。

<手立て1>子どもが価値観の変容を実感できるようにする。

導入で同一の内容項目（4月に実施した「鈴木明子」を教材にした授業）で考えた自己の価値観を想起させ、同じテーマ「何かをやりとげるのに、大切なのはどんな心？」を設定した。その後の展開で「小川笙船」の学習を通して、その価値観の深化を図るようにした。

テーマ：何かをやりとげるのに、大切なのはどんな心？

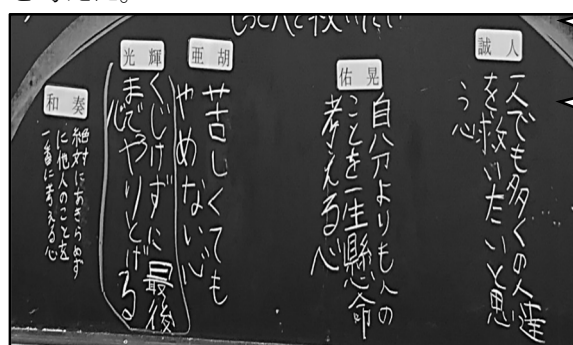


<手立て2>「1番」というキーワードを追加し、議論を引き起こす。

展開で「小川笙船」の気持ちや行動を多面的・多角的に検討した後、テーマ「何かをやりとげるのに、大切なのはどんな心？」について考えさせる。子どもの意見がある程度出揃った後で、「1番」というキーワードを追加し、考えの認め合いや磨き合いを引き起こすようにした。

### (2) 指導と評価の一体化

本検証授業では、「鈴木明子」で考えた価値観と「小川笙船」で考えた価値観の比較を通して、どれぐらい価値観が深化したかを見取っていくこととした。また、「1番」というキーワードを追加することで、その理由を説明する過程で多面的・多角的な思考を促すことができるのではないかと考えた。

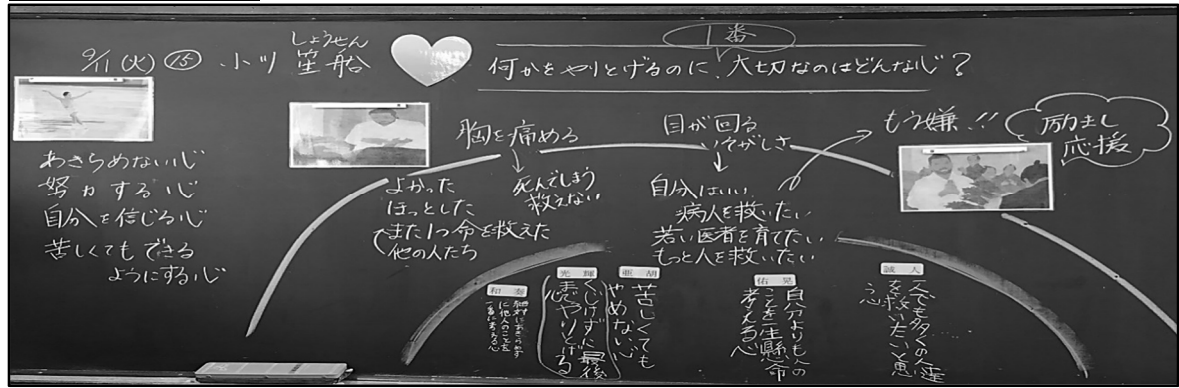


1人でも多くの人達を救いたいと思う心

自分よりも人のことを一生懸命考える心

「鈴木明子」の学習でもった価値観は、「自分のために」という視点であった。「小川笙船」の学習では、「相手のために」という視点が価値観に加わった。

授業後の板書の写真



(3) 検証授業 I から見えた成果 (○) と課題 (●)

- 「小川望船」の授業を構成するに当たって、同一の内容項目（A-5 希望と勇気、努力と強い意志）である「鈴木明子」の授業に着目したことにより、1 単位時間の授業だけでなく、年間を見通した指導の在り方が分かり、ワクワクする授業づくりの材料が増えた。
- 同一の内容項目であっても「鈴木明子」と「小川望船」から子どもがもつ価値観は異なるものであるので、「深化を図る」ではなく、「新たに加える」という視点で授業を行っていくことが大切であることに気付くことができた。それが子どもの価値観の広がりにつながっていくと考える。
- 自己の生き方についての考えを深める際に、教材が生かされていなかったため、発問や学習方法を工夫し、教材との繋ぎを大切にする授業を構築していく必要がある。

検証授業 II

南中学校 第3学年 1組 内容項目 B-6 思いやり、感謝  
 主題名 周囲への感謝（教材名「夢は大空に」 出典：本研修所自作教材）

<教材レベルで具体化したねらい>  
 ふるさとの偉人として後藤勇吉の功績を理解するとともに、勇吉や妻キクヨへの自我関与が中心の学習を展開することで、目標達成に向かう努力の裏には家庭や周囲のサポートが不可欠であることに気付かせ、それに感謝することができる心や態度を育てる。

(1) ワクワクする授業づくり

本教材は、昨年度本研修所が作成した延岡市の偉人「後藤勇吉」を扱った地域教材である。検証授業 I と同様に実話教材である。検証授業 I の課題解決も踏まえて、以下の2つの手立てを設けることで、ワクワクする授業づくりに取り組んだ。

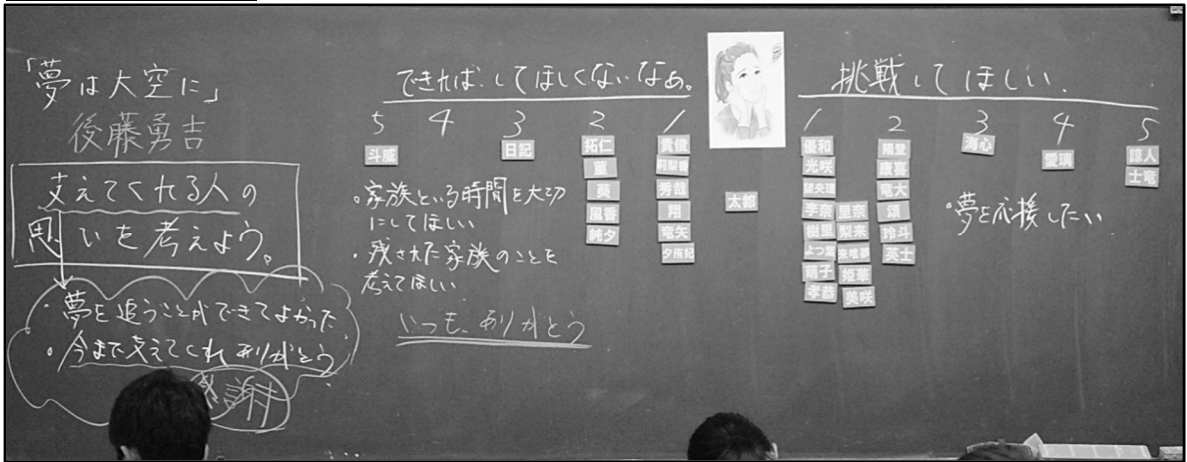
<手立て1>地域教材を扱い、ふるさとの魅力を考えさせる。

ふるさとの偉人や支えた人々の多様な生き方について考えさせることで、興味・関心を高めながら生きることの魅力や意味について考えの深化を図るようにした。さらに、ふるさとへの愛情を感じさせることで地域社会に参画しようとする心を養うことを目指すようにした。

<手立て2>役割演技を通して、多面的・多角的に考えさせる。

展開で、「あなたは、妻として勇吉の危険を伴う太平洋横断計画に対し、『できれば挑戦してほしい。』か『挑戦してほしい。』のどちらの気持ちが強いですか。」と発問し、それぞれの心情の強さを5段階に分けてネームカードを貼らせ、自分の考えを明らかにした後に、役割演技を行った。以下が実際の板書と役割演技で活用した台本である。

授業後の板書の写真



できれば挑戦してほしくない	
記者 (質問者)	
「キクヨさん、勇吉さんについてどう考えていますか。」	
キクヨ (あなた)	
「私は、できるだけ挑戦してほしくありません。」	
だって・・・自分の言葉で	」
記者 (質問者)	
「でも・・・自分の言葉で	」
キクヨ (あなた)	
「自分の言葉で	」

できれば挑戦してほしい	
記者 (質問者)	
「キクヨさん、勇吉さんについてどう考えていますか。」	
キクヨ (あなた)	
「私は、挑戦してほしいと思っていますよ。」	
だって・・・自分の言葉で	」
記者 (質問者)	
「でも・・・自分の言葉で	」
キクヨ (あなた)	
「自分の言葉で	」

最初は記者(質問者)を教師が行い、学級全体の前で自分の言葉で説明する生徒の姿を見せることで、多様な価値観に触れさせた。さらに、自分と立場の異なる友だちとの役割演技を全員に行わせることで、それぞれがもつ価値観を認め合ったり、磨き合ったりさせた。

(2) 指導と評価の一体化

本検証授業では、妻キクヨに焦点を当て、支えてくれる人の思いについて考えさせた上で、周囲への感謝の手紙を書かせるようにした。この指導を通して、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深められるように工夫した。

(3) 検証授業Ⅱから見えた成果 (○) と課題 (●)

- ふるさと教材において、先人の生き方を扱うことで、生きることへの魅力や意味の深さについて考えの深化を図り、自分自身の人間としての生き方に迫ることができた。
- 検証授業Ⅰの課題を受けて、展開の後半で自己の生き方についての考えを深める前に、教材を生かすための発問を行うことで、教材で深めた価値観を自己の生き方に繋ぐことができた。
- ネームカードをそれぞれ5段階の立場で分けたが、「なぜ、そう考えたのか。」や「5と4では何が違うのか。」など、それぞれの考えやそこにネームカードを貼った根拠について迫っていくことで、より多面的・多角的な見方へと発展させることができたのではないかと考える。
- 教材を通して道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めることができたからこそ、書くことができた感謝のメッセージだったのだろうか、という疑問が残った。教材をより生かし、個々がもつ価値観を深めることができる授業の在り方をさらに追究していく必要がある。

### 検証授業Ⅲ

南方小学校 第3学年2組 B-10 友情、信頼

主題名 友だちと助け合って (教材名「目の前は青空」 出典：光村図書)

<教材レベルで具体化したねらい>

互いの気持ちがすれ違っている場面からみんなが助け合おうとする場面への気持ちの変化に自我関与させて考えさせることで、相手のことを考えるとはどういうことなのかに気付かせ、友だちと互いに理解し合い助け合おうとする道徳的判断力や心情を育てる。

#### (1) ワクワクする授業づくり

本教材は、互いの気持ちがすれ違っている場面から、みんなが助け合おうとする場面へと気持ちの変化が見られる共感教材である。検証授業Ⅱの成果と課題を受け、自己の生き方について考えを深める際に、教材との繋ぎをもっと大切にできないかと考えた。そこで以下の3つの手立てを設けることで、ワクワクする授業づくりに取り組んだ。

<手立て1>視覚化することで、問題解決意識を育てる。

互いの気持ちがすれ違っている場面から、みんなが助け合おうとする場面への気持ちの変化を「心情メーター」で視覚化し、板書に示した。子どもたちは視覚化された「心情メーター」を見比べることで、「気持ちが変化したのはなぜか。」「心がすっきりしたのはなぜか。」という問いを生み出すことができ、本時のテーマに繋げることができた。

<手立て2>3つの視点を追うことで、多面的・多角的に考えさせる。

展開では、主人公の信二の気持ちを中心に自我関与させる学習指導過程を設定したが、補助発問を通して、信二だけでなく太一やめぐみ、周りの人たちの思いや互いのよさにも気付かせることで、本時の価値について多面的・多角的に考えさせるようにした。

<手立て3>価値を実感させるために役割演技を行う。

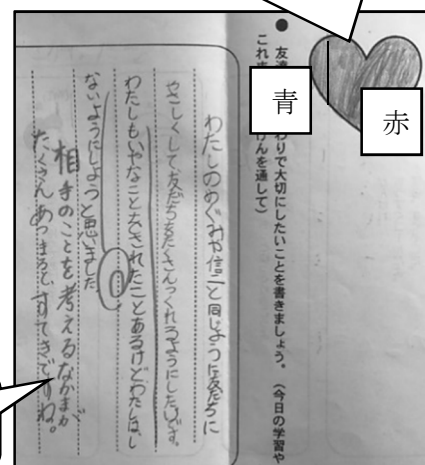
中心場面で役割演技を行うことで、友だちと助け合うよさについて体験的に考えたり、様々な立場から考えたりすることができるようにした。今回の役割演技は、これまでの学習で気付いた価値を実感させることで、さらに理解を深めるための手段として用いるようにした。

#### (2) 指導と評価の一体化

教材から離れ、道徳的価値に基づいて自分の生活を振り返らせるために、自分のクラスを振り返り、教材と同じような経験や友だちと助け合ってよかった経験、友だち関係でこれから大切にしたいことなどを引き出すようにした。その際、教材との繋がりを大切にするために右のような「心情メーター」を活用し、ワークシートに考えを書かせることにした。

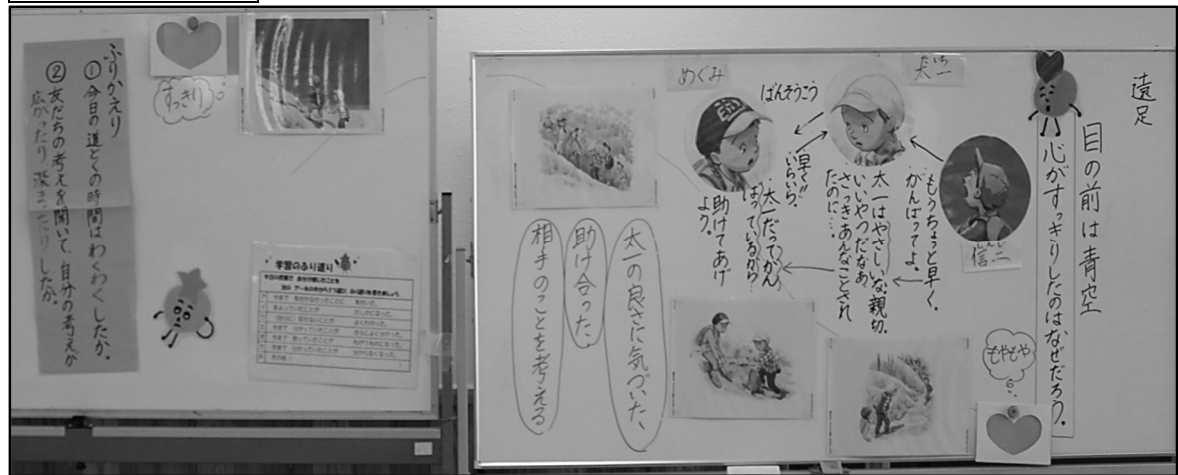
そうすることで、子どもたちは本時の学びをスムーズに自分の生活に繋げていくことができたと思われる。また、教材での学びを受けて自分の生活を振り返ることができていた。

自分のクラスの現状を「心情メーター」で表した。



教材を通して  
もらった感想

授業後の板書の写真



(3) 検証授業Ⅲから見えた成果 (○) と課題 (●)

- 自分の生活を振り返って考えさせる際に、「心情メーター」を活用し、教材との繋がりを大切にすることで、評価に生かすことができた。
- 役割演技には、道徳的価値に気付かせることだけでなく、実感させることにも効果があることに気付いた。
- これまでの検証授業ではA項目・B項目での検証を行ったが、C・D項目でも研究を生かすことができるか検証する必要がある。

検証授業Ⅳ

東海中学校 第2学年4組 内容項目 D-2 2よりよく生きる喜び

主題名 人間を愛する心 (教材名「足袋の季節」 出典：日本文教出版)

<教材レベルで具体化したねらい>

主人公の気持ちに自我関与させ、自分の経験と照らし合わせながら考えることで、後悔や人間の弱さについての理解を深め、その存在について自覚と共感をして自分を愛し、特に今後の学校生活において、後悔のない正しい判断をするなど、よりよく生きようとする心情を育てる。

(1) ワクワクする授業づくり

本教材は、ふとしたことから、おばあさんに嘘をついて釣り銭をごまかしてしまい大きな後悔を抱えた主人公が、おばあさんにかけてもらった言葉を支えとして、今後の自分のよりよい生き方について考える内容である。主人公の気持ちを追っていき、自我関与させたいが、主人公の後悔という気持ちだけでなく、その後の生き方に目を向けてほしいと考えた。そこで、以下の2つの手立てを設けることで、ワクワクする授業づくりに取り組んだ。

<手立て1> 投影的な発問で、主人公に自我関与させる。

物語の最初の釣り銭をごまかしてしまう場面で、「自分だったら言うか、言わないか」と投影的に発問し、どうするかを考えさせるようにした。物語において、主人公の気持ちになって二者択一の方法で考えさせることで、自分のこととして捉えさせた。その後、物語に沿って、主人公の気持ちを追っていき、主人公を取り巻く状況や生き方についてじっくりと自我関与できるようにした。



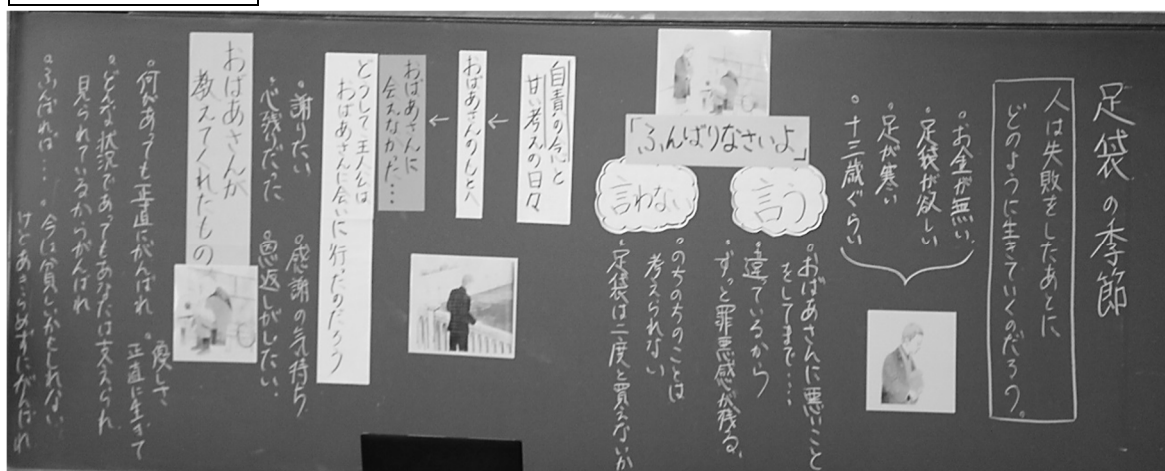
## ＜手立て2＞展開の後半で教材から離れず、主人公の未来を考えさせる。

一般的な道徳の授業展開であれば、展開の後半では教材から離れることが多い。しかし、今回はあえて教材から離れることをせず、物語にはない主人公の未来を考えさせた。そうすることで、子どもたちは、主人公の今後の生き方について考えを深めるとともに、その生き方に自分の生き方を投影させるのではないかと考えた。

### (2) 指導と評価の一体化

本検証授業では、主人公の気持ちや生き方を丁寧に追わせた。そこから、自分の今後の生き方、学校生活の送り方など、人間としての生き方についての考えを深めることができたかを見取るようにした。主人公の気持ちやおばあさんが教えてくれたものについて考え、友だちと意見を交換する活動の中で、多面的・多角的に考えたり、自分自身との関わりの中で考えたりできるようにした。

#### 授業後の板書の写真



### (3) 検証授業Ⅳから見えた成果 (○) と課題 (●)

- アンケート結果で自分たちの様子を振り返らせた後、主人公に自我関与させる発問を行うことで、教材を自分のこととして捉えさせることができた。
- 導入から展開まで教材に関する内容で統一し、教材から離れないことで、子どもたちが一貫性をもって、主人公に深く自我関与することができた。
- 子どもたちの心を揺さぶる発問があれば、「後悔」という感情が強く残り、その後の気持ちを追わせたときに、より深く考えさせられたのではないかと感じた。授業全体を通して、揺さぶる場面等を明確にし、発問を構成していく必要がある。

## 2 評価の在り方

### (1) 授業における評価の在り方

子どもの学習状況の把握を基に授業に対する評価と改善を行う上で、学習指導の過程や指導法を振り返ることが重要である。教師自らがその指導を評価し、その評価を授業改善に生かすことが、道徳性を養う指導の改善につながると考え、検証授業の中で実践的に取り組んだ。

### (2) 評価に関するリーフレットの作成

「道徳科における評価の基本的な考え方」や「評価に関するQ&A」、「評価の所見例」などを記載した評価に関するリーフレットを作成している。2月下旬に、本市の教職員に配付する予定である。

## VIII 成果と課題（成果…○、課題…●）

- 4回の検証授業を通して、昨年度の成果と課題を生かしながら、指導と評価の一体化を図った授業づくりや授業改善を行ったことで、子どもも教師もワクワクする道徳科の授業の在り方について深めることができた。
- 葛藤教材以外の実話教材や創作教材におけるワクワクする授業づくりに取り組んだことにより、様々な教材における子どもも教師もワクワクするための学習指導過程や指導方法の工夫について深めることができた。
- 「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうか。」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうか。」の2つの視点を大切にした学習指導案や学習指導過程の工夫により、子どものよりよき変容をきちんと見取れる評価方法を確立することができた。また、その評価を授業改善に生かすことができた。
- 延岡市学校教育研修所道徳科部会等との連携を強化し、研修会を合同で開催することなどを通して、延岡市の先生方の悩みを生かした授業づくりや研究内容の提案を行い、本研究の成果を全体に発信、共有することができた。また、3月には、本研修所で作成した「評価に関するリーフレット」を延岡市の全学校に配付する予定である。
- 道徳科の授業づくり、授業改善という共通の話題で、小学校、中学校の先生が協力して研究を進めてきたことにより、小中9か年間を見通した研究ができた。それぞれの校種の授業参観や協議は、双方にとってよい刺激となり、授業力向上に繋がったと考える。
- 2か年の研究を通して、多くの成果を得ることができた。しかし、小学校では本年度から、中学校では来年度から道徳科がスタートするなど、まだまだスタート段階である。教科書の活用の仕方など、さらに研究が必要な課題が多くあると考える。
- 授業公開や「評価に関するリーフレット」の作成などを通して、研究内容の発信と共有を図ることができたが、まだ十分とは言えない。これからも本研修所員が中心となり、子どもも教師もワクワクする道徳科授業の推進に努め、より全体に広げていく必要がある。

### <引用・参考文献>

- ・ 小学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」 (文部科学省)
- ・ 中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」 (文部科学省)
- ・ 「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について (報告) (文部科学省)
- ・ 道徳に係る教育課程の改善等について (答申) (中央教育審議会)
- ・ 新・道徳授業論 (道徳教育・永田繁雄氏による連載) (明治図書)
- ・ 「特別の教科 道徳」評価について 資料 (京都市教育委員会)

### <研究同人>

平成30年度 延岡市学校教育研修所

所長：丸山 真二 事務局長：花岡 道義 学校教育課指導主事：城後 誠

常任研究員 統括主任：明石 宏一 (土々呂小)

甲斐 由起子 (延岡小) 宇戸田 貢 (恒富小) 増井 汐理 (南小)

津曲 康夫 (緑ヶ丘小) 坂東 里夏 (南方小) 大田川 真志 (南中)

濱川 美帆 (東海中) 峯田 寛子 (黒岩中) 宮崎 卓也 (北浦中)